

現行本行致本集

四

現代日本紀行文文学全集

東日本編

ほるぷ出版

現代日本紀行文学全集 東日本編

監修 志賀直哉

佐藤春夫

川端康成

小林秀雄

井上靖

発行日 昭和五一年八月一日 初版発行

発行所 東京都新宿区新宿二一九一三  
電話 東京〇三―三五四―七〇三一(代)

株式会社 ほる出版

代表 山浦喜三夫

総発売元 東京都新宿区新宿二一九一三  
電話 東京〇三―三五六―六二二一(代)

株式会社 ほる

代表 中森蒔人

制作 東京連合印刷株式会社

# 目次

〔東京〕

日和下駄 永井荷風 3

水の東京 幸田露伴 46

隅田川の諸橋 木下杢太郎 58

千代田城 龜井勝一郎 65

武藏野 國木田獨歩 73

高尾紀行 正岡子規 87

大島行 林芙美子 89

小笠原紀行 小林秀雄 97

〔千葉〕

房總鼻眼鏡 内田百閒 102

犬吠岬紀行 吉田絃二郎 117

九十九里濱の初夏 高村光太郎

〔茨城〕

潮來十二橋 水原秋櫻子

真孤の中 久保田万太郎

土浦の川口 長塚節

水郷めぐり 若山牧水

筑波遊記 徳富蘇峰

〔栃木〕

鹽原日記 岩野泡鳴

日光 田山花袋

華嚴瀧 幸田露伴

〔群馬〕

赤城にて或日 志賀直哉

焚火 志賀直哉

赤城行 尾崎一雄

みなかみ紀行 若山牧水

草津温泉 志賀直哉

223

浅間登山記 正宗白鳥

229

山を想ふ 水上瀧太郎

234

伊香保 寺田寅彦

241

榛名 横光利一

250

みちの記 森鷗外

258

〔埼玉〕

寫生紀行 寺田寅彦

265

或る田舎町の魅力 吉田健一

278

妻坂越 河井醉茗

283

〔神奈川〕

游秦野記 柳田國男

287

鎌倉一見の記 正岡子規

290

滑川畔にて 嘉村礒多

292

熱海まで 幸田文 304

箱根の山々 近松秋江 309

〔静岡〕

伊豆の旅 島崎藤村 320

豆北豆南 蒲原有明 332

私の伊豆 川端康成 341

海郷風物記 木下杢太郎 369

初島紀行 與謝野晶子 384

萬葉紀行―田兒の浦 土屋文明 387

〔山梨〕

湖水めぐり 野上豊一郎 393

道學先生の旅 戸川秋骨 401

山中湖畔野鳥行 川端康成 405

富嶽百景 太宰治 408

富士山 小泉八雲 421

甲斐わかひこ路 井伏鱒二

436

執筆者・發表紙誌一覽

450

東  
日  
本  
編



なる夢の世の形見を傳へて、拙きこの小著、幸に後の日のかたり草の種ともならばなれかし。

乙卯の年晩秋

荷風小史

## 日和下駄 一名東京散策記

永井 荷風

### 第一 日和下駄

人並はづれて丈が高い上にわたしはいつも日和下駄をはき蝙蝠傘を持つて歩く。いかに好く晴れた日でも日和下駄に蝙蝠傘でなければ安心がならぬ。此は年中濕氣の多い東京の天氣に對して全然信用を置かぬからである。變り易いは男心に秋の空、それにお上の御政事とばかり極つたものではない。春の花見頃午前の晴天は午後二時三時頃からきまつて風にならねば夕方から雨になる。梅雨の中は申すに及ばず。土用に入ればいついかなる時驟雨沛然として來らぬとは計りがた

## 序

東京市中散歩の記事を集めて日和下駄と題す。そのいはれ本文のはじめに述べ置きたれば改めてこゝには言はず。日和下駄は大正三年夏のはじめころよりおよそ一歳あまり、月々雜誌三田文學に連載したりしを、此度米刃堂主人のもとめにより改竄して一卷とはなせしなり。茲にかく起稿の年月を明にしたるは此書板成りて世に出づる頃には、篇中記する所の市内の勝景にして、既に破壊せられて跡方もなきところ尠からざらん事を思へばなり。見ずや木造の今戸橋は蚤くも變じて鐵の釣橋となり、江戸川の岸はせめんとにかためられて再び露草の花を見ず。櫻田御門外また芝赤羽橋向の閑地には土木の工事今將に興らんとするにあらずや。昨日の淵今日の瀬と

をつゝむ幌の中、しつぱり何處ぞで濡れの場を漬するもの亦無きにしもあるまい。閑話休題日和下駄の效能といはゞ何ぞ夫不意の雨のみに限らんや。天氣つゞきの冬の日と雖山の手一面赤土を捏返す霜解も何のその。アスファルト敷きつめた銀座日本橋の大通、矢鱈に溝の水を撒きちらす泥濘とて一向驚くには及ぶまい。

私はいかくの如く日和下駄をはき蝙蝠傘を持つて歩く。

市中の散歩は子供の時から好きであつた。十三四の頃私の

家は一時小石川から麴町永田町の官舎へ引移つた事があつた。勿論電車のない時分である。私は神田錦町の私立英語學校へ通つてゐたので、半藏御門を這入つて吹上御苑の裏手なる老松鬱々たる代官町の通をばやがて片側に二の丸三の丸の高い石垣と深い堀とを望みながら竹橋を渡つて平川口の御城門を向うに昔の御搦屋今の文部省に沿うて一ツ橋へ出る。この道程もさほど遠いとも思はず初めの中は物珍しいので却て樂しかつた。宮内省裏門の筋向なる兵營に沿うた土手の中腹に大きな榎があつた。其の頃その木蔭なる土手下の路傍に井戸があつて夏冬ともに甘酒大福餅稻荷鮎湯なんぞ賣るものがいめい荷を却して往來の人の休むのを待つてゐた。車力や馬方が多い時には五人も六人も休んで飯をくつてゐる事もあつた。これは竹橋の方から這入つて來ると御城内代官町の通は歩くものにはそれ程に氣がつかないが車を曳くものには限りも知れぬ長い坂になつてゐて、丁度此の邊がその中途に當つてゐるからである。東京の地勢はかくの如く漸次に麴町四谷の方へと高くなつてゐるのである。夏の炎天には私も學校の歸途井戸の水で車力や馬方と共に手拭を絞つて汗を拭き、土手の上に登つて大榎の木蔭に休んだ。土手には其の時分から既に「昇ル可カラズ」の立札が付物になつてゐたが構はず登れば堀を隔て、遠く町が見える。かくの如き眺望は敢てこゝのみならず、外濠の松蔭から牛込小石川の高臺を望むと同じ

く先づ東京中での絶景であらう。

私は錦町からの歸途櫻田御門の方へ廻つたり九段の方へ出たりいろ／＼遠廻りをして目新しい町を通つて見るのが面白くてならなかつた。然し一年ばかりの後途中の光景にも少し飽きて來た頃私の家は再び小石川の舊宅に立戻る事になつた。其の夏始めて兩國の水練場へ通ひだしたので、今度は繁華の下町と大川筋との光景に一方ならぬ興を催すことゝなつた。

今日東京市中の散歩は私の身に取つては生れてから今日に至る過去の生涯に對する追憶の道を進るに外ならない。之に加ふるに日々昔ながらの名所古蹟を破却して行く時勢の變遷は市中の散歩に無常悲哀の寂しい詩趣を帯びさせる。およそ近世の文學に現れた荒廢の詩情を味はうとしたら埃及伊太利に赴かずとも現在の東京を歩むほど無殘にも傷ましい思をさせる處はあるまい。今日見て過ぎた寺の門、昨日休んだ路傍の大樹も此次再び來る時には、必貸家か製造場になつて居るに違ひないと思へば、それほど由緒のない建築も又はそれほど年經ぬ樹木とても何とはなく奥床しく又悲しく打仰がれるのである。

一體江戸名所には昔から其れほど誇るに足るべき風景も建築もある譯ではない。既に寶齋齋其角が類柑子にも「隅田川絶えず名に流れたれど加茂桂よりは賤しくして肩落したり。山並もあらばと願はし。目黒は物ふり山坂おもしろけれど果てしなくて水遠し、嵯峨に似てさみしからぬ風情なり。王子

は宇治の柴舟のしばし目を流すべき島山もなく護國寺は吉野に似て一目千本の雪の曙思ひやらるゝにや爰も流なくて口惜し。住吉を移奉る佃島も岸の姫松の少きに反橋のたゆみをかしからず宰府は崇め奉る名のみにして染川の色に合羽ほしわたり思河のよるべに芥を埋む。都府樓觀音寺唐繪と云はんに四ツ目の鐘の裸なる、報恩寺の薨の白地なるぞ屏風立てしやうなり。木立薄く梅紅葉せず、三月の末藤にすがりて回廊に筵を設くるばかり野には心もとまらず……云々。」そして其角は江戸名所の中唯ひとつ無疵の名作は快晴の富士ばかりだとした。これ恐らくは江戸の風景に對する最も公平なる批評であらう。江戸の風景堂宇には一として京都奈良に及ぶべきものはない。それにも係らず此の都會の風景は此の都會に生れたるものに對して必ず特別の興趣を催させた。それは昔から江戸名所に關する案内記狂歌集繪本の類の夥しく出版されたのを見て容易に推量する事が出来る。太平の世の武士町人は物見遊山を好んだ。花を愛し、風景を眺め、古蹟を訪ふ事は即ち風流な最も上品な嗜みとして尊ばれてゐたので、實際には其程の興味を持たないものも、時には此を銜つたに相違ない。江戸の人が最も盛に江戸名所を尋ね歩いたのは私に見る處矢張狂歌全盛の天明以後であつたらしい。江戸名所に興味を持つには是非とも江戸輕文學の素養がなくてはならぬ。一步を進むれば戯作者氣質でなければならぬ。

此頃私が日和下駄をカラ／＼鳴して再び市中の散歩を試み

初めたのは無論江戸輕文學の感化である事は拒まない。然し私の趣味の中には自らまた近世デレツタンチズムの影響も混つてゐやう。千九百五年巴里のアンドレエ・アレエといふ一新聞記者が社會百般の現象をば芝居でも見る氣になつて此を見物して歩いた記事と、又佛國各州の都市古蹟を歩廻つた印象記とを合せて *En France* と題するものを公にした。その時アンリイ・ポルドオという批評家が此を機會としてデレツタンチズムの何たるかを解剖批判した事があつた。茲にそれを紹介する必要はない。私は唯西洋にも市内の散歩を試み、近世的世相と竝んで過去の遺物に興味を持つた同じやうな傾向の人が居た事を斷つて置けばよいのである。アレエは西洋人の事故その態度は無論私ほど社會に對して無關心でもなく又肥瘠的でもない。これは其の本國の事情が異つてゐるからであらう。彼は別に爲すべき仕事がないから已むを得ず散歩したのではない。自ら進んで觀察しやうと企てたのだ。然るに私は別に此と云つてなすべき義務も責任も何にもない云はば隱居同様の身の上である。その日その日を送るに成りたけ世間へ顔を出さず金を使はず相手を要せず自分一人で勝手に呑氣にくらす方法をと色々考案した結果の一つが市中のぶらぶら歩きとなつたのである。

佛蘭西の小説を讀むと零落れた貴族の家に生れたものが、僅少の遺産に自分の身だけはどうかやらかうやら日常の衣食には事缺かぬ代り、浮世の樂を餘所に人交りもできず、一生涯を

果敢なく淋しく無爲無能に送るさまを描いたものが澤山ある。かういふ人達は何か世間に名をなすやうな専門の研究をして見たいにも其れ丈の資力がなし職業を求めて働きたいにも働く口がない。せん方なく素人畫をかいたり墓地を歩いたりして成りたけ金のいらぬ様な其の日の送方を考へてゐる。私の境遇はそれとは全く違ふ。然しその行爲とその感慨とは稍同じであらう。日本の現在は文化の爛熟してしまつた西洋大陸の社會とはちがつて資本の有無に係らず自分さへやる氣になれば爲すべき事業は澤山ある。男女烏合の徒を集めて芝居をしてさへ若し藝術の爲めといふやうな名前を付けさへすれば其れ相應に看客が来る。田舎の中學生の虛榮心を誘出して投書を募れば文學雜誌の經營も亦容易である。慈善と教育との美名の下に弱い家業の藝人をおどしつけて安く出演させ、切符の押賣りで興行をすれば濡手で粟の大儲も出来る。富豪の人身攻撃から段々に強面の名前を賣り出し懐中の暖くなつた夕時を見計つて妙に紳士らしく上品に構へれば、やがて國會議員にも成れる世の中。現在の日本ほど爲すべき事の多くして而も容易な國は恐らくあるまい。然しさういふ風な世渡りを潔しとしないものは宜しく自ら讓つて退くより外はない。市中の電車に乗つて行先を急がうといふには乗換場を過る度に毎に見得も體裁もかまはず人を突き退け我武者羅に飛乗る蠻勇がなくてはならぬ。自らその蠻勇なしと省みたならば徒に空いた電車を待つよりも、泥龜の歩み遅々たれども、自動車

の通らない横町或は市區改正の破壊を免れた舊道をてく／＼と歩くに如くはない。市中の道を行くには必しも市設の電車に乗らねばならぬと極つたものではない。いさゝかの遅延を忍べばまだ／＼悠々として潤歩すべき道はいくらもある。それと同じやうに現代の生活は亞米利加風の努力主義を以てせざれば食へないと極つたものでもない。髻を生し洋服を着てコケを脅さうという田舎紳士風の野心さへ起さなければ、よしや身に一錢の蓄なく、友人と稱する共謀者、先輩若しくは親分と稱する阿諛の目的物なぞ一切皆無たりとも、猶優游自適の生活を營む方法は尠くはあるまい。同じ露店の大道商人となるとも自分は髭を生し洋服を着て演舌口調に醫學の説明でいかさまの薬を賣らうより寧ろ黙して裏町の縁日にポツタラ焼をやくか糝粉細工でもこねるであらう。苦學生に扮装した此頃の行商人が横風に靴音高くがらりと人の家の格子戸を明け田舎訛りの高聲に奥様はおいでかなぞと、稍ともすれば強請がましい凄味な態度を示すに引き比べて昔ながらの脚半草鞋に菅笠をかぶり孫太郎蟲や水蠟の蟲箱根山山椒の魚、または越中富山の千金丹と呼ぶ聲。秋の夕や冬の朝なぞ此の聲を聞けば何とも知れず悲しく淋しい氣がするではないか。

されば私のてく／＼歩きは東京といふ新しい都會の壯觀を稱美して其の審美的價値を論じやうといふのでもなく、さればとて熱心に江戸なる舊都の古蹟を探り此れが保存を主張しやうといふ譯でもない。如何となれば現代人の古美術保存と

いふ奴が抑も古美術の風趣を害する原因で、古社寺の周圍に鐵の鎖を張りペンキ塗の立札に例の何々ス可ラズをやる位ならまだしも結構。古社寺保存を名とする修繕の請負工事などと來ては、是れ全く破壊の暴舉に類する事は改めてこゝに實例を擧げるまでもない。それ故私は唯目的なくぶらぶら歩いて好勝手なことを書いてゐればよいのだ。家にゐて女房のヒステリー面に浮世をはかなみ、或は新聞雜誌の訪問記者に襲はれて折角掃除した火鉢を敷島の吸殻だらけにされるより、暇があつたら歩くにしくはない。歩け〜と思つて、私はてく〜ぶら〜のそ〜といろ〜に歩き廻るのである。

元來が此の如く目的のない私の散歩に若し幾分でも目的らしい事があるとすれば、それは何といふ事なく蝙蝠傘に日和下駄を曳摺つて行く中、電車通の裏手なぞにたま〜残つてゐる市區改正以前の舊道に出たり、或は寺の多い山の手の横町の木立を仰ぎ、溝や堀割の上にかけてある名も知れぬ小橋を見る時など、何となく其のさびれ果てた周圍の光景が私の感情に調和して少時我にもあらず立去りがたいやうな心持をさせる。さういふ無用な感慨に打たれるのが何より嬉しいからである。

同じ荒廢した光景でも名高い宮殿や城郭ならば三體詩などで人も知つてゐるやうに、太掖勾陳處處疑。薄暮毀垣春雨裏。或はまた、煬帝春游古城在。壞宮芳草滿人家。など、詩にも歌にもして傳へることができやう。

然し私の好んで日和下駄を曳摺る東京市中の廢址は唯私一個人にのみ興趣を催させるばかりで容易に其の特徴を説明することの出来ない平凡な景色である。譬へば砲兵工廠の煉瓦塀にその片側を限られた小石川の富坂をばもう降盡さうといふ左側に一筋の溝川がある。その流れに沿うて薊閣魔の方へと曲つて行く横町なぞ即その一例である。兩側の家並は低く道は勝手次第に迂つてゐて、ペンキ塗の看板や模造西洋造りの硝子戸なぞは一軒も見當らぬ處から、折々水屋の旗なぞの閃く外には横町の眺望に色彩といふものは一ツもなく、立屋芋屋駄菓子屋挑灯屋なぞ昔ながらの職業に其の日の暮しを立てゝゐる家ばかりである。私は新開町の借家の門口によぐ何々商會だの何々事務所なぞといふ木札のれい〜しく下げてあるのを見ると、何といふ事もなく新時代のかゝる企業に對して不安の念を起すと共に、其の主謀者の人物についても甚しく危険を感じるのである。それに引かへて斯う云ふ貧しい裏町に昔ながらの貧しい渡世をしてゐる年寄を見ると同情と悲哀とに加へて又尊敬の念を禁じ得ない。同時にかういふ家の一人娘は今頃周旋屋の餌になつてどこぞで藝者でもしてゐはせぬかと、そんな事に思到ると相も變らず日本固有の忠孝の思想と人身賣買の習慣との關係やら、つゞいて其の結果の現代社會に及ぼす影響なぞについていろ〜込み入つた考へに沈められる。

ついで此間も麻布網代町邊の裏町を通つた時、私は活動寫眞

や國技館や寄席なぞのピラが崖地の上から吹いて来る夏の風に飄つてゐる水屋の店先、表から一目に見通される奥の間に十五六になる娘が清元をさらつてゐるのを見て、いつものやうにそつと歩を止めた。私は不健全な江戸の音曲といふものが、今日の世にその命脈を保つてゐる事を訝しく思ふのみならず、今もつて其の哀調がどうしてかくも私の心を刺戟するかを不思議に感じなければならなかつた。何氣なく裏町を通りかゝつて小娘の弾く三味線に感動するやうでは、私は到底世界の新しい思想を迎へる事は出来まい。それと共に又この江戸の音曲をばれい／＼しく電氣燈の下で演奏せしめる世俗一般の風潮にも伴つて行く事は出来まい。私の感覺と趣味と又思想とは、私の境遇に一大打撃を與へる何物かの來らざる限り、次第に私をして固陋偏狹ならしめ、遂には全く世の中から除外されたものにしてしまふであらう。私は折々反省しやうと力めても見る。同時に心柄なる身の末は一體どんなになつてしまふものかと、寧ろ擲して自分の身をば他人のやうに其の果敢ない行末に對して皮肉な一種の好奇心を感じる事すらある。自分で己れの身を抓つてこの位力を入れ、ば成程この位痛いものだど獨りでいぢめて獨りで涙ぐんでゐるやうなものである。或時は表面に恬淡洒脱を粧つてゐるが心の底には絶えず果敢いあきらめを宿してゐる。これが爲めに「涙でよごす白粉の其の顔かくす無理な酒」といふやうな珍しくもない唄が、聞く度毎に私の心には一種特別な刺戟を與へる。

私は後から勢よく襲ひ過ぎる自動車の響に狼狽して、表通から日の當らない裏道へと逃げ込み、そして人に後れてよろよろ歩み行く處に、わが一家の興味と共に苦しみ、又得意と共に悲哀を見るのである。

## 第二 淫祠

裏町を行かう、横道を歩まう。かくの如く私が好んで日和下駄をカラ／＼鳴して行く裏通にはきまつて淫祠がある。淫祠は昔から今に至るまで政府の庇護を受けたことはない。目こぼしで其の儘に打捨て、置かれ、ば結構、稍ともすれば取拂はれべきものである。それにも係らず淫祠は今猶東京市中敷へ盡されぬ程澤山ある。私は淫祠を好む。裏町の風景に或趣を添へる上から云つて淫祠は遙に銅像以上の審美的價値があるからである。本所深川の堀割の橋際、麻布芝邊の極めて急な坂の下、或は繁華な町の倉の間、又は寺の多い裏町の角なぞに立つている小さな祠やまた雨ざらしのまゝなる石地藏には今もつて必ず願掛の繪馬や奉納の手拭、或時は線香などが上げてある。現代の教育はいかほど日本人を新しく狡猾にしやうと力めても今だに一部の愚昧なる民の心を奪ふ事が出来ないであつた。路傍の淫祠に祈願を籠め缺けたお地藏様の類に涎掛をかけてあげる人達は娘を藝者に賣るかも知れぬ。義賊になるかも知れぬ。無盡や富籤の傀儡のみを夢見て居るかも知れぬ。然し彼等は他人の私行を新聞に投書して復讐を